

今年も残すところ数日となりました。リーマン証券の破綻により世界中に不況の嵐が吹き荒れ、倫理法人会会員の皆様におかれましては、その波を受けながらも懸命に努力されている企業が数多くあることでしょう。

暦の上では師走(十二月)は一年の締めくくりの月です。今年の元旦に祈誓された目標を、今一度思い起こし検証することは、後始末の実践として大事です。凝縮

事業を思い立ち、これを進め、成就するために大切な倫理の項目(目的・準備・手順・方法・始末)が五つあります。とくに最後の「始末」のところは軽視できません。

「あと始末はよいか。ぬかりはないか。くりはよいか。あと始末ができれば物事はまだ完成したのではない。ここからヒビが入り、穴があいてくずれぬ」

(『サブリーマンと経営者の心得』参照)
「立つ鳥は跡を濁さずといわれる。あと片づけをせず、使った道具の手入れをせず、靴を揃えぬ、傘のしずくを乾かさぬ、こうした事は身のたしなみとしての単なる作法だとか、行儀とかと心得ているのが、これまでの考えであるが、これを忘れることが、いろいろの不幸の原因となるのである」

(『万人幸福の栞』参照)
後始末が悪く締まりのない心意・行為が、健康状態、家庭、人間関係などに影響を及ぼします。とくに経済生活に及ぼす影響として以下が挙げられます。

金銭、物質に不足や欠乏をきたす。
金銭・物質を落したり失ったり、すられたり、騙される。物がすぐ破損したり、



後始末はスタートなり 一年を清々と終えよう

故障したりする。高じてくると、ついには出火などして、すっかり失ってしまうようなことにもなる。

勝海舟は、大事に当たつての心構えとして、「事、未だ成らず、小心翼翼。事、まさに成らんとす、大胆不敵。事、既に成る、油断大敵」と喝破しました。

実行前は、細心な研究、調査、計画のもとに十二分な準備をせよ、それはあたかも「小心」と思えるほどに。実行に当たつては一切の不安を捨て、一気呵成に行なえ。成就の後も油断せずに、緊張を継続せよ。

中でも最も難しいのが「事が既に成ったときに油断せぬこと」です。つい気を抜き、最後の詰めが甘くなり、だめ押しを怠ると逆転負けを喫します。契約したけれど代金の回収ができなかった、アフター・ケアが悪いため途中でキャンセルされた等は、よくある話です。

さまざまな後始末について述べてきた中で、共通する実践のポイントがあります。

- 一、何事も、間髪入れず、すぐにする。
- 二、物事が終わっても「気」をぬかない。
- 三、お客さま、仕事仲間、仕事場や品物、道具等に対して感謝の心を込めてする。

後始末は単なる後片づけではありません。はじめであり、感謝の表現形式であり、次の働きへのスタートとなるものです。

来年の干支は「寅」です。倫理カルタに「虎は風を起す」とあります。職場、家庭での仕事をしつかりと締めくくり、来たる平成二十二年には経営の安定を確かなものとするために、さらに日本創生の新風を巻き起こしていきましょう。

え・牧えみこ